

長嶺 隆

ヤンバルクイナを守り育てる獣医師



絶滅の危機にある沖縄の鳥、ヤンバルクイナを守るためになら、けがの治療から人工繁殖、飼い猫の管理まで、なんでもやる。「トキの二の舞にはさせない」。獣医師の目はまっすぐだ。

文=芦崎 治 写真=石川 直樹

「キヨツ、キヨツ、キヨツ…」

獣医師、長嶺隆（46）がヤンバルクイナ救命救急センターにそっと入っていくと、12羽がけたたましい警戒音を発した。

ここは沖縄本島北端の村、180人が暮らす国頭村の安田という集落だ。2005年に長嶺率いるNPO法人「どうぶつたちの病院」が救命救急センターという、天然記念物ヤンバルクイナ保護の拠点を作った。

繁殖期は4月から8月にかけてだが、村人が草刈りしたあとに卵が見つかると人工孵化にも挑戦してきた。

地上性の鳥類ヤンバルクイナは高さ1メートルほどしか飛べない。それゆえカラスや捨て猫に襲われることがある。手術が必要となれば国頭村と沖縄本島中部にある、うるま市の病院を幾度となく往復する。

鳥の楽園に育つ

1963年、沖縄が日本に復帰する9年前、中城湾に面した具志川市（現うるま市）で長嶺は生を受けた。農家の8人兄弟の末っ子で、蒼い海と一面のサトウキビ畑を前に育った。

中城湾が干潮を迎えると、与勝半島の付け根から見渡す限りの大干潟が現れたという。数キロ先まで遠望できる干瀬は、数千羽というシギ、

チドリが餌をついぱむ楽園だった。

広大な干潟に1カ所だけ、島とも呼べないような島が出没した。

月の運行によって潮がゆるゆる満ちてくる。長嶺が海水に導かれるように小さな島に足が向いた。鳥たちも潮に押され、一歩一歩後退する。気がつくと、数千の野鳥に囲まれていることがあった。

満潮になると、いっせいに羽音を立てて飛び立った。シギ科、チドリ科の鳥の背中は灰色、腹部は純白。風になびく一枚のカーテンのように見えた。群れが方角を変えると、グレーのカーテンは瞬時にホワイトに変化した。そんな野生生物の群舞は、幼い日から当たり前の光景だった。

1972年、沖縄が米国から復帰。本土では首相が「日本列島改造論」を唱えていた。公共事業が沖縄の干潟を埋め尽くすのは、それから5、6年後だ。県立美里高校に野鳥研究会を作った長嶺の野鳥好きはつとに知られ、傷ついた野鳥が年に百羽は持ち込まれるほどだった。

そんなころに大干潟が破壊しつくされる。

「鳥を観察することが大好きだったのに、私たちのフィールドが埋め立てられる。そして野生生物が消えていく。ショックを受けた」

ながみね たかし

1963年、沖縄県具志川市（現うるま市）生まれ。日本大学農獸医学部卒。2001年にながみねどうぶつクリニックを開院すると、「ヤンバルクイナたちを守る獣医師の会」やNPO法人「どうぶつたちの病院」を立ち上げ、ヤンバルクイナの保護、繁殖に力を注ぐ。

長嶺の鳥類への情念は、ますます募るばかりだった。鳥を思うばかり勉強が手につかず、大学受験に失敗。「禁鳥」と書いて勉強机に貼った。

ところがその年の6月、山階鳥類研究所がヤンバルクイナを発見する。「60年ぶりの新種発見!」と大きな新聞報道が出て、禁鳥の誓いはもろくも崩れ去った。

ヤンバルクイナは「幻の鳥」。沖縄北部に行っても、確実に見られる保障はない。夜半に友人と家を出て、やんばるの森をめざした。「どうせ見

「人間の勝手で捨てられた野猫に責任を取らせるのは、筋が通らない。 どこか間違っている」

られないだろう」と話し合っていた。

夜明け前、国頭村のある川の前で待機した。沖縄では珍しく朝靄がかかっていた。その朝靄のなかから突然ヤンバルクイナが現れた。

「時間は1分もあったかどうか。2、3回、何かをついばんで、森に帰つていった。そのシーンがスローモーションビデオのように脳裏に焼きついだ。受験勉強どころではなくなってきた」

そんな弟を見て、「獣医になら……」と助言したのが13歳上の姉だった。

その後、東京・世田谷区にある日本大学農獸医学部に入学した。「私は農家の出身なので、牛、豚などの産業動物を扱う獣医師になるんだろうな」と漠然と考えていたという。

ところが、大学に野生動物を治療

する獣医師が教えにやってくる。埼玉県にある動物病院の院長だった。実習で通いながら、獣医師の国家試験に合格。その病院に就職した。

「都会ではペットが人々の心の支えになっている。それを感じ取るいい機会だった」

ヤンバルクイナの危機に直面

11年勤務して、現場で鳥類など野生動物の臨床的な研究や治療のスキルを磨いていった。37歳になり、独立する時期にさしかかっていた。

「沖縄は大好きだし、家族もいる。沖縄に帰ろう」と決心。2001年5月に、具志川市前原に「ながみねどうぶつクリニック」を開業した。

その年の12月に、「ヤンバルクイナが猫に襲われている」という報道があった。

那覇の人々が、都会からわざわざ沖縄北部の森にペットを捨ててくる。そんな時代になっていた。捨てられた犬は野犬、猫は野猫になってヤンバルクイナを絶滅に追いやっていた。

「自分は今まで、何をしていたのか。絶滅するかもしれない!」

長嶺は、自分を責めた。自分が激しい野鳥好きで、しかもペットの獣医師になっているのではないか。

やんばるの生態系は亜熱帯特有の気候の中で肉食獣が一切存在しない優しい生態系にできあがっている。そんな森で進化したヤンバルクイナは野犬や野猫に対応できない。

気がつくと受話器を取って、環境省「やんばる野生生物保護センター」の自然保護官に「なんとかしましょう!」と電話をしていた。

翌年、環境省は野猫を捕獲して、飼い主がない場合は処分するといふ方針を打ち出した。国内外の動物愛護団体から抗議が殺到した。

その時、長嶺はこう感じていた。「人間の勝手で捨てられた野猫に責任を取らせるのは、筋が通らない。どこか間違っている」

沖縄は太平洋戦争中、国内で唯一苛烈な地上戦のあった土地。「命どう(こそ)宝」を世界に発信してきた。一方で、人口比でみると犬、猫を最も多く殺処分している県でもあった。

「ヤンバルクイナは飛べない。他の島に渡って逃げることができない。僕は自分たち沖縄県民に、この責任があると思ったんですね」

クイナのすみかで国際会議を

県内の獣医師に声をかけた。そして「ヤンバルクイナたちを守る獣医師の会」が立ち上がる。

当初、年間で370匹の野猫が森で捕獲された。もの凄い数だった。すぐに長嶺が安田の区長に会って、オスの去勢、メスの避妊手術を願いでいる。安田地区は、マイクロチップを使って飼い猫の登録制を実施した日本で初の集落になった。

長嶺の考えた猫対策三原則は、「増やさない・捨てさせない・捕獲する」。結果、野猫の数が激減した。

他方で、もう一つの脅威が進行していた。外来生物マンガースの存在である。100年前、那覇でハブ対策で放った10数頭のマンガースが3万頭に増殖し、北上を続けていた。

長嶺は米国に飛んだ。種の保存に関する世界的な専門家チームと会



生息数は80年代に比べて半減、絶滅が危ぶまれている。

って、絶滅危惧種の現状評価と対策を相談した。そして2006年1月に、「ヤンバルクイナ保全のための国際会議」を国頭村安田で開催する。

「彼らが生息する場所でやりたい。地元の公民館に、国際自然保護連合(IUCN)の種の保存委員会の専門家グループと県内外の専門家に集っていただきました」

日本で初めて開く国際ワークショップだった。安田は食堂もない静かな集落。小さな公民館で国内外の専門家80人が種の保存を議論した。

高校時代から長嶺を知る「沖縄野鳥の会」会長の山城正邦は、こう言う。「地元の新聞が自然保护の記事を書けば、『沖縄の新聞は偉いね』。沖縄県警が密猟者を捕まえたら、『県警はすごいね』と誉める。裏で動いていても絶対に自分の手柄にしない。彼のいいところです」

ヤンバルクイナを追いつめた野猫に責任は取らせない。野猫は手術して、新しい飼い主を探す。長嶺隆の体に「命どう宝」、沖縄の思想が脈々と息づいている。(敬称略) □

芦崎 治
(あさき おさむ)

1954年、富山県生まれ。立教大学法学部卒。雑誌記者を経てノンフィクションライター。桜美林大学非常勤講師。